

国立教育政策研究所 教育課程研究指定校事業（芸術・音楽）

「弦楽器の音色を生かして四重奏を楽しもう！」

写真添付

神奈川県立厚木高等学校
教諭 真壁宗太郎

■研究の内容

1. 音色や鑑賞領域との関連を意識させた音楽表現の工夫を高める指導方法
2. 学習過程を重視した評価の改善
3. 観点別評価「B」と評価する判断のポイント
4. 題材同士の接続性や関連性の工夫

■ 題材設定の理由 「なぜ弦楽四重奏なのか？」

1. 本校は音楽経験豊富な生徒が多い。
しかし、弦楽器の経験者はごくわずか。
→弦楽器をより身近な存在として認識させたい。
クラシック音楽に対する鑑賞意識の変化。 (※関連性)
2. 神奈川県学力向上進学重点校・SSH指定
→学校全体での「探究的な学び」を生かす。 (※接続性)
3. 音を出すこと自体は容易だが、「よい音色」「よい表現」のためには試行錯誤が必須。
→「一人一役」の探究的・協働的な学習過程で、音色や表現に対するこだわりを見取りやすい。 (※評価)

しかし、大きな問題が・・・

私は弦楽器がまったく演奏できません！

■個人的な疑問

教師が模範的に演奏できなければ、その楽器を用いた授業の実施は不可能なのか…？

→基礎的な奏法を習得していれば概ね可能ではないか。
インフォーマルな学習過程において、生徒に「こうしたい」という明確な意思や目標をもたせることが技能獲得の原動力となり、一定の効果は得られた。
(ただし、今回は外部講師による影響が大きかった。)

■授業の大まかな流れ

	項目	目標 ・ 概要
1	事前学習	基礎的・基本的な知識や弦楽のイメージを得る ※楽器の構造、独奏曲や四重奏における各楽器の役割 等
2	専門家による指導	音色に関心をもち、奏法を身に付ける ※昭和音楽大学より講師派遣 65分×2コマ実施
3	セクション練習	ユニゾンによる美しい音色を味わう ※パートごと3～4名でのグループ練習
4	四重奏	意図した表現の実現を目指す ※各パート1名ずつの四重奏での練習
5	成果発表会	演奏会形式

■ 練習の様子（専門家による指導）

動画

■ブレイン・ストーミング導入のねらい

学校全体での「探究活動の推進」を意識した取組として導入。
生徒はこうした話合いによる学習を全教科で行っている。

【今回採用したブレストの3原則】

①否定しない ②思いつき歓迎 ③他者の意見から発展させる

■シートA 外部講師指導後の「技能」の向上を目的に活用

■シートB 弦楽四重奏での「表現」の向上を目的に活用

その技能は何のために活用できるのか、生徒が必要性を感じ取り、
実感を伴いながら主体的に表現を深めていく過程を重視するため、
ブレストの目的を2段階に分けて焦点化し、解決方法について論理的
的に思考→考察していく学習を促した。

■ブレイン・ストーミング

資料 写真添付

■ 成果発表会の様子

動画

■評価について

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
<p>① 弦楽器固有の音色、奏法、表現形態(四重奏)などに関心を持ち、それらを生かして演奏する学習に主体的・協働的に取り組もうとしている。</p> <p>② 弦楽器の音色や奏法の特徴と表現上の効果との関わりに関心を持ち、鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	弦楽器固有の音色、奏法、表現形態(四重奏)などを知覚・感受して、その特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。	弦楽器固有の音色、奏法、表現形態(四重奏)などの特徴を生かした演奏をするために必要な技能を身に付け、創造的に表している。	弦楽器の音色や奏法の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取り、音楽に対する理解を深めよさや美しさを創造的に味わって聴いている。 ※他題材との関連で別途鑑賞を実施。

■技能におけるB評価 具体的な評価材料

【四重奏の中で自らの役割を果たせているか。】

→① 他パートの音を聴き、速度変化に対応している。

→② 動作で音程・音色を調整しながら演奏している。

この2点で、「B」と明確に評価することが可能である。

■成果と課題（ワークシートやアンケートから）

一方的に教え込まない探究型・協働型の授業の中で、「難しい・もどかしい・やりにくい」と感じたことは？

- 正解が分からない。分かっても、たどり着くまでが大変。
- なかなか意見が合わず、解決に至らないことがある。
- 上達に時間がかかり、表現まで結びつかない。 等

→「**技術的な問題解決の難しさ**」に関する意見が多数。

■成果と課題（ワークシートやアンケートから）

それとは逆に、

「得られた・学習しやすい・効果的」と感じたことは？

- ・ 受け身にならず、欠点を補い合いながら進められた。
- ・ 客観的に判断し、最善策を探していく楽しさがあった。
- ・ ブレストが大いに役立ち、大きな達成感が得られた。 等

→技術的な難しさはあるが、**自ら学び身に付けていく楽しさ**を感じていた生徒が多数。

■生徒の声をもとした改善点

技術的な上達の進度は各生徒によって異なるため、全員一律の授業ペースで進めることは困難である。

→ **「情報共有する場面」**の設定・充実が重要！

技術的な問題に対する解決方法を見つけるための時間を適切に設定することで、様々な「正解」を**生徒自身**が発見できるようにしていく必要がある。**実感を伴った**技能の習得に導いていくために、定期的な情報共有が欠かせない。

■鑑賞との関連 及び 他の題材との接続性

■鑑賞「作曲家の気持ちを読み取って鑑賞しよう」を実施。

- ・ベートーヴェン「悲愴」
- ・ピアノの生演奏で鑑賞（演奏は教育実習生）

① 作曲者（作曲家）の視点

→ どんな演奏を望んでいたか？

② 演奏者の視点

→ 作曲家の何を読み取り表現するか？

作曲家の生い立ちや楽譜の情報から、演奏者の向こう側にいる作曲家の思いを読み取りながら鑑賞する。

■鑑賞との関連 及び 他の題材との接続性

【題材同士の接続性】

弦楽 → ピアノ？

- ・ 音楽に内在する「感情の共通性」
- ・ 演奏者の視点（弦楽の演奏経験を生かす）
- ・ 音の微細な変化に反応

ご清聴ありがとうございました。